

第2回 就実大学・就実短期大学
自己点検・評価・改善に関する外部評価委員会
報告書



Shujitsu University
Shujitsu Junior College

2021年12月
就実大学・就実短期大学外部評価委員会

目 次

I. はじめに	1
II. 外部評価実施概要	2
1. 日程等	2
2. 外部評価委員名簿	3
III. 外部評価委員会評価	4
1. 総括評価	4
2. 部局別評価	6
3. 外部評価委員からの意見（提言）	10
IV. 外部評価委員会議事録	12

I. はじめに

就実大学・就実短期大学は2020年度から学外評価委員による外部評価委員会を実施しています。2021年3月に開催された第1回外部評価委員会では、「就実大学・就実短期大学中期計画」(2020年3月～2025年3月)に関する2020年度実績の点検評価と、2019年度の教育プログラムに関する大学・短大・各学部学科の自己点検評価の二つについてヒアリングが行われ、その後、委員会から報告書が提出されました。その内容は、本学の自己点検・評価・改善委員会を通じて教職員に周知を図るとともに本学ホームページにおいて公表しています。

第2回外部評価委員会は、2021年9月24日にコロナウイルス感染症へ配慮してオンラインで開催され、2020年度の教育プログラムに関して大学・短大・各学部学科が実施した自己点検に対してヒアリング及び評価が行われました。4名の評価委員からはそれぞれの経験に基づく多様な視点から、本学の教育活動について貴重なご意見を多く頂戴しました。評価できる点と改善を要する点についても組織ごとに丁寧に評価していただき、その内容は本報告書にまとめられている通りです。大学・短大全体の取り組みについては、PDCAサイクルを適切に機能させ、教育プログラムの質の向上が積極的に図られていると評価していただきました。一方で、各学部・学科・研究科が作成する資料の形式、数値目標の設定、改善に向けた対策の明示、学生アンケート調査の結果を各組織において分析し学生の満足度向上に活かす取り組み等、具体的な課題についてもご指摘を受けました。

外部評価委員の方々には、本報告書を通じて改めて感謝申し上げますとともに、いただいたご意見やご指摘を自己点検・評価・改善委員会並びに全学FDにおいて共有し、本学の教育研究活動の改善につなげるよう教職員全体で取り組んでまいります。

就実大学自己点検・評価・改善委員長
就実短期大学自己点検・評価・改善委員長
桑原 和美

Ⅱ. 外部評価実施概要

1. 日程等

就実大学・就実大学大学院・就実短期大学 自己点検・評価・改善に関する外部評価委員会
を下記のとおり実施した。

日 時 令和3年9月21日(火) 午後13時00分～午後15時00分

場 所 オンライン会議 (GoogleMeet)

外部評価委員

甲南大学文学部教授 井野瀬久美恵

○岡山大学名誉教授 佐々木健二

株式会社丸五代表取締役社長 福田正彦 (書面調査)

両備ホールディングス株式会社取締役常務執行役員 山田昌治

※○は座長

学内関係者

桑原和美 (学長)

見尾光庸 (副学長)

野本明成 (副学長)

川崎剛志 (人文科学部長)

石原みちる (教育学部長)

古塚秀夫 (経営学部長)

塩田澄子 (薬学部長)

苅米一志 (人文科学研究科長)

原奈津子 (教育学研究科長)

森秀治 (医療薬学研究科長)

森安秀之 (短大部長)

鎌田雅史 (幼児教育学科准教授) (学科長代理出席)

三宅統 (生活実践科学科長)

石黒太 (教育開発センター准教授)

矢吹優子 (事務部長)

松原正充 (事務局 総合企画課長)

犬飼道代 (事務局 総合企画課事務員)

大下洋一 (事務局 総合企画課事務員)

2. 外部評価委員名簿

任期： 令和3年2月24日～令和5年2月23日

井野瀬 久美恵 甲南大学文学部教授

○佐々木 健二 岡山大学名誉教授

福田 正彦 株式会社丸五代表取締役社長

山田 昌治 両備ホールディングス株式会社取締役常務執行役員

○は座長

Ⅲ. 外部評価委員会評価

1. 総括評価

2021年度就美大学・就美短期大学自己点検・評価に係る外部評価は、自己点検・評価を通じて明らかとなった諸問題に対して、大学が適切に改善を行っているのか、さらに、自己点検・評価が教育プログラムの質向上を図るシステムとして有効に機能しているかという観点から、就美大学・就美短期大学から提出された2020年度教育プログラムに関する自己点検評価報告書を基に、書面調査ならびにヒアリング（令和3年9月21日）を実施した。

その結果、就美大学・就美短期大学では、教育改革への高い意識のもと、自己点検・評価報告書に課題解決への取り組み状況や新たに明らかとなった課題ならびに今後の展望等がまとめられており、PDCA（Plan-Do-Check-Action）サイクルを適切に機能させ、教育プログラムの質の向上が積極的に図られていると判断する。

ただし、大学として種々の有用なデータ・資料は蓄積しているものの、今回の自己点検・評価報告書を確認する限り、各研究科・学部・学科作成の資料は、事項や項目などの統一がなされておらず、また、個別の取り組みにおける数値目標や改善に向けた対策が示されていないものが見受けられた。大学を取り巻く環境の厳しさが増す中、学生ならびに社会の期待に応えるため、大学の方針を明確に示した上で、内容によっては具体的な数値目標や達成期限を定め、学長のリーダーシップの下、各取り組みを推進することにより、特色ある人材教育、産学連携、社会貢献に取り組むことを期待する。

とりわけ、後述の【改善を要する点】以降で指摘する課題については、改善に向けて努力していただきたい。

【評価できる点】

○特徴的な事項としては下記のもの挙げられる。

- ・全学として教学関係のデータ整理やデータ分析のためのエクセルフォームを作成・利用することにより、各部局がそれぞれの DP の指標となる科目について検討する際に成績分布を出せるようになり、教学 IR の質を向上させている。
- ・昨年度の外部評価報告書において、「指標（KPI, Key Performance Indicators）の記載が少ないため、文章として非常に説明的なのだが分かりにくいという状態になっている。」と指摘したが、今回の自己点検・評価シートの記載方法については、全学的に一つのスタイルを示したことで、全体として非常に見やすく改善されている。ただし、そのうえで各学科の個性をどのように表現、表記するかは今後の課題となろう。
- ・企業においては、ES（従業員満足度）を高めないと CS（顧客満足度）を高めることに結びつかないことから従業員満足度を調査しているが、これと同様に、就美大学・就美短

期大学においては複数の学生アンケートを実施しており、自己点検・評価のデータとして
いることは評価できる。ただし、無記名のアンケートは無難な回答になる傾向が強いので、
批判的意見に着目して解決を模索することも重要だと思われる。

- ・2022年度の教育プログラムの点検評価における活用を目指して、学習成果可視化シス
テムの導入を進めている。
- ・大学としてキャリア教育を改善したいと考えており、学部に関わらず、初年次から自分
の将来像と大学生活を結び付けて考えるキャリア教育の充実に取り組んでいる。
- ・一人の学生を継続的にフォローする仕組みとして担任制度を確立しており、担任マニユ
アルを作成して統一した指導方針を共有している。また、学部によってはさらに学年主
任を設けて学生指導体制を強化している。
- ・全学の内部質保証に関しては自己点検・評価・改善員会で検討をしており、学部・学科
内のPDCAについては、各学部・学科で行なっている。また、卒業時アンケートやALCS
の結果等については全学FDで共有し、意見を募っている等、PDCAサイクルを適切
に機能させている。
- ・全学的に、科目とDPの紐付けに関しては学科ごとのFD研修を行い、DPに基づいた
カリキュラムマッピングを実施し、DPの再構成、授業科目の到達目標へのDPの落と
し込みを行なっている。
- ・学生アンケートとしてALCSやPROGテストを実施するだけでなく、卒業後の卒業生
と企業へのアンケートも実施している。また、回答率が低いため、回答率をあげる工夫
をしていきたいとのことなので、今後の検討を期待する。

【改善を要する点】

○特に注意を要する事項としては下記が挙げられる。

- ・学生アンケート（2020ALCS）の結果では、3年生で、大半の内容が理解できなかつ
たと感じているとの回答が全体の50%を超えており、また、授業内容がつまらなく感
じたことがあったとの回答が80%を超えている。本アンケートが無記名アンケートで
あることから個々の学生の属性や学業状態と結びつけた分析ができず、原因や問題を
明確にするのは難しいと思われるが、理解度や満足度が低いことは大学にとって決し
て望ましいことではないことから、早急に何らかの改善策を検討すべきと考える。
- ・ALCS、PROGの調査で、大学からの案内が役に立っているかという質問に20～30%
の学生が（あまり、ほとんど）役に立たないと答えており、英語の運用力についても、
「減った」「変化なし」が70%近くに達している。また、物事の本質を見て判断する力
もなかなか上がっておらず、学費に見合った教育内容についても不満を感じている学
生が多いことなど、大学として改善の余地があると考えられる。

2. 部局別評価

人文科学 研究科

【評価できる点】

- ・2019年度より研究科改善検討委員会を発足させ、FD研修の開催内容などについて検討しており、2021年度も同委員会が継続して、改善の取り組みに当たっていることを評価する。このFD研修の開催内容や改善検討委員会の改善の取り組みを文書化し、公表すると共に、根拠資料とすべきだと考える。

【改善すべき点】

- ・授業アンケート評価などが行なわれておらず、活動の根拠資料が乏しいと思われる。

人文科学部

【評価できる点】

- ・点検項目「点検項目に基づく教育課程及びその内容、方法の適切性に関する総合的な自己点検・評価」に関して、「①学部DP4に関する在学生の到達度評価において、文章表現の向上に比べて、口頭表現の向上の実感が低い点である。②卒業研究ループリックによる評価が一部で徹底されていないことが判明した。」と問題を明記し、その取り組み計画等を記載していることは評価したい。今後この取り組みが順調に進むことを期待する。

人文科学部 表現文化学科

【改善すべき点】

- ・各学年に数名、履修モデルを下回ったり、進級不可の判定を下されたりする学生が見受けられることから、成績不振者への的確な対応が早急に必要と思われる。

人文科学部 実践英語学科

【改善すべき点】

- ・一部の科目について成績分布の著しい偏り（AやSの偏り）が認められる。教員の考え方もあるだろうが、学生の不平等・不満足の原因になり得る問題であり、特に同じ科目で複数の教員が担当している場合に成績の分布が大きく異なるのは教育上問題がある。この点に関する学部教員の認識はどうか。すでにこの問題について対応中であれば、その対応策を自己点検評価報告書に記してほしい。

人文科学部 総合歴史学科

【評価できる点】

- ・卒論ルーブリック評価を定めているが、実行が不十分であることから、今年度から、卒論評価には必ず共通のルーブリックによる評価を徹底するとしていること、さらに来年度には、4年次の履修指導時にルーブリックを説明した WebClass の掲載を学科会議で協議する等、成績のルーブリック評価の取り組みを評価する。

教育学研究科

【改善すべき点】

- ・コースによっては開講科目数が他コースと比べて多すぎることで、専任教員の専門性との不一致が見られることには改善が必要である。また、心理学系コースでは、二つの資格課程を設けていることもあり、学生、教員の双方に過密なスケジュールとなっていることなどの問題があることから、実践力を高めるプログラムに集中させる必要がある。

教育学部

【評価できる点】

- ・DP と科目の対応が曖昧な部分が多かったため、2021 年度より DP を見直しており、今後はそれに対応する科目での評価を行うとしている点に改善が認められ、評価したい。

【改善すべき点】

- ・単位修得ができなかった学生が 10%存在するという問題に対して、具体的な解決策を検討すべきと考える。
- ・一部の科目に「成績分布の偏り」が見られることから、偏りの原因を追究して改善することが必要である。
- ・2020 年度卒業者のアンケートにおいて「統率力」が低くなっていることについて、その要因を分析し、この項目のポイント向上を目指す取り組みが必要だと考える。

教育学部 初等教育学科

【評価できる点】

- ・DP4（教育活動）と DP5（地域）との統合等、DP の見直しを行うことを評価する。また、学生指導の在り方、学科の卒業必修科目、教育実習の指導時期等を見直すことについて、その実施を期待する。

【改善すべき点】

- ・在学生の到達度と評価に関して、根拠資料全般にわたりデータの記載が少ない。
- ・一部の科目に「成績分布の偏り」が見られることから、偏りの原因を追究して改善することが必要である。特に、実習の成績評価が全員同じ点数（履修者 34 名、全員 80 点）

で偏差値がゼロというのは客観的に見て疑問を感じる。

教育学部 教育心理学科

【評価できる点】

- ・複数の DP を統合する等， DP の見直しを行うことを評価する。
- ・「各学年に分布している，累積 GDP が 2.0 未満の学生へのきめ細かい指導」，「コンピテンシーのうち対人基礎力の統率力がやや低い傾向があるため，これらに対する何らかの方法の検討」，「2022 年度のカリキュラムの一部改訂」，「教育活動と地域における活動を統合した DP の検討」等の実施を期待する。

【改善すべき点】

- ・一部の科目の成績分布において S 評価への偏りが見られるが，偏りの原因を明確にして改善することが必要である。

経営学部 経営学科

【評価できる点】

- ・自己点検・評価シートに「主査と副査との間で評価差に 10 点以上開きがある学生が 20% 程度おり，ループリックの見直しやその運用方法についての教員研修が必要だと考えられる」との記載には「問題の自覚」がはっきりとかがえる。その点を評価すると共に解決策の実施を期待する。

【改善すべき点】

- ・評価シート全般にわたって，データ（数値）の記載が少ない。根拠資料・データの典拠を記すだけでなく，もっとデータに基づく考察，記載をするべきと考える。
- ・一部の科目の成績分布において S 評価への偏りが見られるが，偏りの原因を追究して改善することが必要である。

医療薬学研究科

【評価できる点】

- ・大学院生に対する評価に関して，学位論文審査基準の達成度を設定したループリック表，ならびに学位論文審査基準のディプロマポリシーとの対応表を用いて実施していることは，客観性があり，評価できる。

薬学部 薬学科

【評価できる点】

- ・学部の内部質保証システムの構築を目指して，自己点検評価改善委員会の開催やマニフェ

ストの作成，DP の達成度の KPI 値を設定，PDCA サイクルシートの計画に基づいて学修支援体制の強化を図る等，その取り組みを評価する。

- ・学部で作成しているマニフェストの中に各種アンケートの目標値を入れ，学生が満足を感じるような経験や授業を行うことを学部全体で共有し，授業改善等に取り組むことにより，学生の満足度の向上を目指している。

【改善すべき点】

- ・学生アンケートにおいて，教学関係のみならず，教学以外の項目においても厳しい評価が多い。薬学部の学生は薬剤師国家試験もあり自分に対する評価が厳しく，他者への評価も厳しくなっているのではないかと考えられるが，薬学部ならではの学生の満足度の向上を目指す取り組みが必要と考える。

短期大学

【評価できる点】

- ・「一部累積 GPA が振るわない学生への各学科での対応」や「定期的に行われる卒業生アンケート，就職先アンケート結果をもとにした DP 達成状況の別の角度からの検証」の実施を期待する。

短期大学 幼児教育学科

【評価できる点】

- ・各授業の成績分布を確認しながら，アセスメント・ポリシーの見直しを含む教員間の評価基準の共有や，目標の再設定などを通して，さらなる教育内容を充実させようとする取り組みを評価する。

短期大学 生活実践科学科

【改善すべき点】

- ・授業担当者間（クラス間）で成績分布が大きく異なることや，単位が修得できなかった学生への対応は早急に改善すべき問題だと考える。

3. 外部評価委員からの意見（提言）

- ・学生アンケート調査の結果が何を映し出すのかについて、大学の場合は不安定要素がいくつか考えられるため、学生の授業評価アンケート項目、授業の達成度や満足度などはクロスさせて見ないと正確なところが見えてこないと思われる。就美大学・就美短期大学から提出された2020年度教育プログラムに関する自己点検・評価報告書では、卒業見込みや単位修得の割合を根拠に「目標が適切である」と評価しているが、「目標が適切である」ためには「根拠資料が適切である」ことが重要である。達成できた面だけでなく、達成できていない点を拾い上げ、それにどう対応したのかを考え、分析し、記述することが大事なのではないか。
- ・ヒアリングの際に、桑原学長から「今回の自己点検では根拠資料の妥当性まで検討できていない。また卒業や進級時に力を身につけているということが前提となった書き方になっているので、できていないところを発見し改善していることが示せるシートにしたい。」との発言があったが、その実施を期待したい。
- ・教員が根拠資料をどう使い、学生の成果をどう評価しているのかといった道筋を各学部・学科内で共有しておくことが必要と考える。定量的な分析と定性的な分析をうまく組み合わせて、何ができていて何ができていないかを、「人を育てている」という目線から分析するとよいと思う。
- ・学生の回答で、「どちらでもない」「満足していない」という回答の学生や、満足度が低い学生について、具体的にその内容を確認して改善の取り組みを考えていただきたい。
- ・大学教育に求められることはいろいろあると思うが、企業の人間が大学教育に期待する一番は、学生に「学び癖」をつけてほしいということではないだろうか。経験則ではあるが、大学できちんと「学び癖」がついている人は、社会に出たとき（例えば会社からの）具体的な指示によって、どんどん成長していく。そして、大学の「やるべきこと」が、「学生に学び癖をつけること」であるという仮説に立つならば、学生たちが自分の「学び癖」をつけるために「やるべきことのリスト」も必要なのではないだろうか。即ち、学生たちが、具体的に4年間あるいは6年間で学び癖をつけるために「やるべきこと」を、大学側がリスト化して提示するわけである。例えば、学部ごと、コースごと、地元就職派か都会就職派か、教員志望か、どんな先生になりたいか、結婚後も仕事を続けたいか等を、学生が目指す方向ごとに、また、学生がやりたい事柄ごとに、アンケートやカウンセリングといった形で入学時に情報収集を行い、それらを基にいくつかのカリキュラム・ポートフォリオを作成し、学生たちに提示する。必須科目と自由取得科目だけではなくて、「キミへのレコメンド科目」なる講義をいくつか案内するのもよいのではないか。また、先生の本棚からお薦めの1冊の推奨やら、実業界や将来就職したい企業の業界研究に資する活動、講演会などへの参加案内等々、1年次から4(6)年次までの「学びの羅針盤リスト」を、どうだとはばかり、学生たちに具体的に提示するのは

どうだろうか。後は、このリストを基に、「何故できない、何故やらない。」「〇〇になりたいなら、もっと内外の文学を読まないと。」等々、年に何回かのガイダンス・チェックタイムを設け、カウンセリングを行う。このチェックタイムに多くの時間をさけないだろうか。重要なのはこのカウンセリングであり、カウンセリングに合理化の考えをもちこむべきではないだろうか。可能な限り、時間をかけて指導をしてほしいと思う。

IV. 外部評価委員会議事録

日 時 2021年9月21日(火)午後13時00分～午後15時00分

場 所 オンライン会議(GoogleMeet)

出席者 外部評価委員

井野瀬 久美恵氏(甲南大学 文学部教授)

○佐々木 健二氏(岡山大学 名誉教授)

福田 正彦氏(株式会社丸五 代表取締役社長)(書面調査)

山田 昌治氏(両備ホールディングス株式会社 取締役常務執行役員)

○は座長

学内関係者

桑原和美(学長), 見尾光庸(副学長), 野本明成(副学長), 川崎剛志(人文科学部長), 石原みちる(教育学部長), 古塚秀夫(経営学部長), 塩田澄子(薬学部長), 苅米一志(人文科学研究科長), 原奈津子(教育学研究科長), 森秀治(医療薬学研究科長), 森安秀之(短大部長), 鎌田雅史(幼児教育学科准教授)(学科長代理出席), 三宅統(生活実践科学科長), 石黒太(教育開発センター准教授), 矢吹優子(事務部長), 事務局(松原正充(総合企画課長), 犬飼道代(総合企画課事務員), 大下洋一(総合企画課事務員))

1. 開会

定刻になり, 桑原学長から開会が告げられた。

2. 議事

(1) 学長挨拶

桑原学長から挨拶と資料の確認がなされた。また, 議事録の作成のため録音・録画をすることについて説明がなされ, 承認された。

(2) 委員の紹介

外部評価委員3名の自己紹介に続いて, 学内出席者の自己紹介が行われた。

(3) 2020年度教育プログラムに関する自己点検・評価について

見尾副学長より2020年度教育プログラムに関する自己点検・評価の実施内容について以下の通り説明がなされた。

○前回は、中期計画も併せて点検したが、今年度からは、教育プログラムの点検評価と事務部門を含めた中期計画に基づく点検評価を分けて実施することとした。

○教学関係のデータ整理やデータ分析のためのエクセルフォームを作成した。特に各学科がそれぞれの DP の指標となる科目について検討する際、このエクセルフォームを用いて成績分布を出せるようにした。

○学習成果の可視化システムの導入に向けて準備を進めており、順調にいけば次年度の教育プログラムの点検評価から活用したい。

○認証評価に向けた準備の中で、特に基準 2 と基準 4 において、各学部学科研究科内の内部質保証システムと学習成果の可視化の点検評価を実施し、学部学科研究科ごとの問題点・改善点等を明らかにして改善に繋げていくことができると考えている。

これより佐々木委員の進行で議事が進められた。

山田委員から、以下のとおり質問・意見が出された。

質問：学生アンケートを興味深く拝見した。企業でも ES を高めないと CS を高めることに結びつかないことから従業員満足度を調査しているが、無記名のアンケートは無難な回答をする傾向が強いので、その中でも批判的な意見に着目して解決をしていかななくてはならない。2020 年度卒業時アンケートにおいて、薬学科は他の学科と比べて評価が低いようだが要因等は分析されているのか。

回答：薬学部については、教学以外に関するアンケートにおいても厳しい評価が多いと感じている。薬学部の学生は薬剤師国家試験もあり自分に対する評価が厳しく、他者への評価も厳しくなっているのではないかと考えている。（塩田薬学部長）

質問：その現状に対して、改善を考えているか。

回答：学生の満足度は高めたいと思っている。薬学部で作成しているマニフェストの中に各種アンケートの目標値を入れ、学生が満足を感じるような経験や授業を行うことを学部全体で共有し、授業改善等に取り組んでいる。（塩田薬学部長）

質問：2020ALCS の結果について、3 年生で、大半の内容が理解できなかったと感じているとの回答が全体の 50%を超えている。また授業内容がつまらなく感じたことがあったとの回答が 80%を超えている。これで学生の趣に応じた内容になっていると評価できるのか。

回答：理解できなかったという学生については理解できるような授業にしなくてはならない。ただし、つまらないという点に関しては単に楽しい授業というのではなく、学部の教育目標に応じて科目を担当する教員が考えていかななくてはならない。満足度や理解度が低いことは本学にとって望ましいことではないということを全体で共有しながら、学科単位で検討してほしいと考えている。（見尾副学長）

無記名アンケートであることから個々の学生の属性や学業状態と結びつけた分析ができないため、原因や問題を明確にするのは難しい。他大学と比べて特に結果が悪いということではないが、原因については検討していきたい。(石黒教育開発センター准教授)

意見：就実大学・短期大学は国家試験や資格等社会で役立つライセンスを取りたいと考えている学生が多いので、自らハードルを高くする学生もおり、授業も難しくなるため追いつかない学生も出てくるのではないかと。(佐々木委員)

回答：各科目の授業評価アンケートの結果と全体的なアンケート結果に乖離がみられるのでその原因について確認する必要がある。(見尾副学長)

質問：2020年度卒業時アンケートにおいて、総合歴史学科の学生が自由記述で、キャリアセンターの対応に不満を述べている。これを一人の不満と捉えるか、貴重な意見と捉えて対策をとられているのか。

回答：本日は事務関連の職員が出席していないので、この学生について具体的な様子はわからない。したがってご質問の直接の答えにはならないが、大学全体についてはキャリア教育を改善したいと考えている。教育学部や薬学部のように早期からキャリア目標を設定して資格を取っていく学生もいるが、3年生になってキャリアを考え始める学生もいる。大学としては学部に関わらず、初年次から自分の将来像と大学生活を結び付けて考えるキャリア教育の充実を図る必要があると考えており、次年度以降改善しようと検討中である。(桑原学長)

井野瀬委員から、以下の通り質問・意見が出された。

質問：私はアンケート調査結果を詳細には見てはいないが、その理由のひとつは、その結果が何を映し出すのか、大学の場合には曖昧で不安定だと思っているからである。学生の授業評価アンケートと授業の達成度や満足度はクロスして見ないといけないのではないかと。また、卒業見込みや単位修得の割合を根拠として「目標は適切である」と評価しているが、目標が「適切である」かどうかには、その根拠資料の適切性が問われる。達成できた面だけでなく、達成できていない点を拾い上げ、それにどう対応したのかの記述も大事である。

回答：達成できなかった点に視点を当てるとするのは大変ありがたいご指摘である。今回の自己点検・評価シートには記載箇所を設けていなかったが、今後検討していきたい。(見尾副学長)

今回の自己点検では根拠資料の妥当性まで検討できていない。また自己点検・評価シートの記載方法については、全学的に一つのスタイルを示したことで、各学科の表記に個性が表れにくくなっている。卒業や進級時に力を身につけているという

ことが前提となった書き方になっているので、できていないところを発見し改善していることが示せるシートにしたい。(桑原学長)

質問：先に学生からのキャリアセンターへの不満があったが、職員も頑張っているのだからうまく通じないということはある。学生についての情報不足からそのようなことが起きているのかもしれない。教員が一人の学生を継続的にフォローしていく仕組みはあるのか。

回答：学生をフォローする仕組みとして担任制度があり、担任マニュアルを作成して統一した指導方針を共有している。学部によっては、さらに学年主任を設けて対応しているところもある。(見尾副学長)

学生とは各担任が密接にコミュニケーションを取っているが、教員の負担が大きいこともあり、継続した指導内容を記録に残すことはできていない。それについては、入学から卒業まで担当教員が変わっても継続的な指導の内容を確認できる形を現在学修成果の可視化の中で示すことができるよう検討している。(桑原学長)

学生の指導においては、学修、心理面、家庭環境等、さまざまな要素が関わっており、一人の担任では十分に対応できないので、組織的に記録を残すことが必要であると共にそれを共有し、担任等が残した記録がキャリア指導等でも活用できることが大事だと考える。(川崎人文科学部長)

質問：評価においては PDCA が回っているかが重要である。以前は期の初めと終わりだけだったのが、現在は期の途中でもどのように実施しているかの記載が求められるようになっており、教員の負担も大きくなっている。そのような状況のもと、学部長や事務方は、どのような会議で意見交換し、改善に向かう行動に移しているのか。

回答：PDCA について、全学の内部質保証については自己点検・評価・改善員会で検討をしている。学部・学科内の PDCA については、各学部・学科で行なっている。卒業時アンケートや ALCS の結果等については全学 FD で共有し、意見を募っているが全学で議論する場は作れていないため、今後検討していきたい。(石黒教育開発センター准教授)

佐々木委員から、以下の通り質問・意見が出された。

質問：単位を修得しているからこの DP の目標を達成していると書いているが、科目と DP の紐付けの客観性はどのように評価しているのか。各学科ではすでに委員会を立ち上げて評価についてチェックしているとは思いますがその科目の内容が本当に DP に一致しているかを確認しているか。いくつかの部局ではピアレビューしているが、もう少し文章として明示することが内部質保証を進めていることの例にな

るのではないか。

回答：これまで全体に雛型のようなものを示してきたが、今回のご指摘を受けて今後は各学部・学科の主体性が出るように改善していきたい。(桑原学長)

科目と DP の紐付けは、学科ごとの FD 研修を行い、DP に基づいたカリキュラムマッピングを実施し、DP の再構成、授業科目の到達目標への DP の落とし込みを行なった。(見尾副学長)

意見：このような取り組みを各学科で行っている点を記載することは認証評価においても重要だと考える。(井野瀬委員)

質問：ほとんどの学部・学科では、卒業生がこのような DP の力を身につけていることの根拠として ALCS や PROG テスト、卒業生アンケートもしているが、卒業後何年か経った学生や就職先へのアンケートによって実際に学生が DP の力を身につけて卒業しているのかを確認することが必要ではないか。またそれは内部質保証を進めていることの大きな手段になる。

回答：卒業後の卒業生と企業へのアンケートも実施している。個別の意見は参考にしているが、回答率が低いため数値的には参考にしづらいつ感じている。回答率をあげる工夫をしていきたい。(桑原学長)

質問：今回、根拠資料を詳しく出しており、シートも見やすくなっているが、もっと学部の特徴がシートに表れてきてもいいのではないか。少なくとも、他学科の資料を参考にするよう学内で共有してもよいのではないか。就実にも IR があり、しっかりやっていると思うが、資料を集めてその内容や使い方を学内で共有することが大事ではないか。これも内部質保証に直結することである。

回答：自己点検・評価の過程で情報を共有するとともに、アンケート調査に関しては FD 研修会を行って全体に結果を共有している。(見尾副学長)

意見：ALCS, PROG の調査で、大学からの案内が役に立っているかという質問に 20～30%の学生が(あまり、ほとんど)役に立たないと答えている。英語の運用力についても、「とても増えた」「やや増えた」を含めても 20～30%で、「減った」「変化なし」が 70%に近いので改善の余地がある。物事の本質を見て判断する力もなかなか上がっていない。また学費に見合った教育内容についても不満を感じている学生が多いことなど、大学として改善の余地がある。

回答：その通りで、よくない結果だと思う。ALCS については開始後 2 年で、コロナもあり分析ができていないが、今後精査していきたい。(石黒教育開発センター准教授)

意見：ALCSは無記名でもあり，比較的学生の正直な声が反映されているかと思う。今後大学が行うべき課題として参考になるのではないか。

意見：人文科学研究科では，研究科改善検討委員会が継続的に改善の取り組みをしているとのことなので，その取り組み内容等を文書化して公表し，根拠資料にした方が良い。

意見：教育学研究科では実施できていないアンケート等があるため，内部質保証の点からも実施に向け準備を進められた方が良い。

意見：人文科学部のシートには，これから取り組むことが2点示されているのでこれらを着実に実施されることを期待する。

質問：表現文化学科での成績不振者への対応を行うと書かれているが，具体的に教えて欲しい。

回答：各学期に単位修得状況を確認し，基準に満たない学生については本人あるいは保護者への対応を組織的に行なっている。そこで対応できないものは学科単位で対応している。(川崎人文科学部長)

質問：実践英語学科では一部の科目について成績が著しく偏っている。大学全体でもAやSの偏りは見られ，教員の考え方もあるだろうが，学生の不平等・不満足の原因にもなる。同じ科目で複数の教員が担当している場合に成績の分布が大きく異なるのは教育上問題がある。学部としてもきちんと評価すべきではないか。また，実際に対応している内容はシートに記述すべきである。

回答：前回は指摘いただいた件であり，偏りについては学科内で改善を進めている。そのような取り組みについても具体的に記載すべきだったと感じている。(川崎人文科学部長)

意見：総合歴史学科でのルーブリック評価の取り組みについてはシートに書かれていることを実行されることを期待する。

回答：今回の自己点検によって全体で決めたルーブリック評価を実施していなかった教員のいることが明らかになったので，今後はルールに従って実施する。(川崎人文科学部長)

意見：教育学研究科のシートには実践力を高めるプログラム改善計画について書かれているので，確実に実践されることを期待している。

意見：教育学部では単位修得ができなかった学生が 10%いるとのことなので、具体的な解決策を検討してほしい。

意見：初等教育学科や教育心理学科では、複数の DP を統合した DP を検討するとのことなので、そのような試みを評価したい。また、今後の指導の仕方を見直すことについても評価したい。

意見：初等教育学科のシートでは、在学生の到達度と評価において全般にわたり数値の記載が少ない。また、実習の成績評価が全員同じ点数で偏差値がゼロというのは客観的に見て疑問である。

意見：教育心理学科では科目の成績評価に S への偏りが見られるので、これについては検討すべきである。

意見：経営学部は、他の学科に比べてもシート中に根拠資料からのデータの記載が少ない。もう少し数値についても触れてもらえると評価者としては確認しやすい。卒論評価の見直しチームでの検討については今後どうなるのか期待する。

意見：医療薬学研究科では、大学院、学位論文の達成度を設定するルーブリックを用い、DP とも対応させて審査している点は客観性があり評価できる。成績分布の偏りはあるが、大学院の場合は全体的にそのような傾向にある。

意見：薬学部については、各種アンケートでの学生の不満足が目につく。授業だけでなく事務や施設に対する不満も他学科に比べて多いため、薬学部で検討することが必要ではないか。学部の内部質保証システムの構築を目指した自己点検評価委員会の開催や、マニフェストの作成は他学部では見られないので評価したい。KPI を示すのは認証評価でも重視されているのでよい方法である。

意見：短期大学では DP の達成度を別の角度から検証するとのことなので実施することを期待したい。

意見：生活実践科学科では、担当者によってクラス間で成績評価に大きく差があるので改善を期待する。

山田委員：学生の回答で、「どちらでもない」「満足していない」という回答の学生や、満足

度が低い学生について、具体的にその内容を確認して改善の取り組みをお願いしたい。

井野瀬委員：自分たちが根拠資料をどう使い、学生の成果をどう評価しているのかという道筋を各学部・学科内で共有しておくことが必要である。定量的な分析と定性的な分析をうまく組み合わせて、何ができていて何ができていないかを、人を育てているという目線から分析するとよいと思う。

桑原学長から、今後の流れについて以下の通り確認された。

○委員会の録画データと議事録を外部評価委員の先生にお送りし、評価報告書を作成していただく。

以上